The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 目で見るWHO　第83号　表紙・目次等 |
| Author(s) | 中村, 安秀 |
| Citation | 目で見るWHO. 2023, 83, p. 1-1 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/91192 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ISSN 2434-7205

# 目で見る WHO

2023 冬号

No.83

Visual Journal of Friends of WHO Japan

公益社団法人
日本WHO協会

# CONTENTS


| | | |
|---|---|---|
| P1 | ごあいさつ | 中村　安秀 |
| P2 | 巻頭特集 | |
| | 保健人材を取り巻く世界の潮流とその変遷 -SDGsとポストコロナに向けて- | 藤田　則子 |
| P6 | セミナー・イベント報告 | |
| | 1. 第13回母子手帳国際会議 | 小松　法子<br>柳澤　沙也子 |
| | 2. 在留外国人の母子保健（jaih-sとの共催フォーラム）<br>～誰もが安心して妊娠出産、子育てができる地域づくりのために～ | 國本　夢生 |
| P14 | NGO・団体紹介 | |
| | NPO法人 Peace of Syria | 中野　貴行 |
| P16 | 国際保健を学べる大学・大学院 | |
| | 1. 沖縄県立看護大学 | 知念　真樹 |
| | 2. 青森県立保健大学 | 吉池　信男<br>三好　美紀 |
| P20 | 留学生日記 | |
| | 佐渡島をフィールドにハーバード大学公衆衛生大学院でPublic Healthを学ぶ | 磯邉　綾菜 |
| P22 | WHO職員日記 | |
| | JPO（Junior Professional Officer）のWHOでの任務 | 柳川　愛実 |
| P24 | WHOニュース　8月／9月／10月 | 林　正幸<br>渡部　雄一 |
| P30 | 関西グローバルヘルス（KGH）の集い | |
| | オンラインセミナー第5弾　第3回：ヒトも動物も昆虫も！健康への取り組み | 小笠原　理恵 |
| P32 | 書籍紹介コーナー　書を抱えてフィールドに出よう！ | 中村　安秀 |
| P33 | International Days（健康関連の国際デー） | |
| P34 | 日本WHO協会沿革／WHO憲章 | |
| P36 | WHOの地域事務局と加盟国 | |
| P37 | 寄付者のご芳名／編集委員のページ | 佐伯　壮一朗 |
| P38 | 入会案内 | |

# ごあいさつ

公益社団法人日本WHO協会　理事長
大阪大学名誉教授
国立看護大学校特任教授
中村　安秀

2020年1月に世界保健機関（WHO）が新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」と宣言してから3年が過ぎました。いろいろな意味で、WHOが大きなニュースになった3年間でした。

この間、何度もWHO憲章を読み返す機会がありました。第二次世界大戦直後の1946年7月に61か国が調印し、1948年4月7日に発効したWHO憲章には、感染症の脅威と平和への希求が行間に満ち溢れていました。

「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが 満たされた状態にあることをいいます。」という有名な健康の定義の日本WHO協会訳は、おかげさまで、最近では入試問題にも引用されるようになりました。ただ、ここで強調したいのは、それ以外のWHO憲章の文章です。

「世界中すべての人々が健康であることは、平和と安全を達成するための基礎」

「健康増進や感染症対策の進み具合が国によって異なると、すべての国に共通して危険が及ぶ」

「一般の市民が確かな見解をもって積極的に協力することは、人々の健康を向上させていくうえで最も重要なこと」

コロナ禍のなかで起きたウクライナ侵攻、高所得国による新型コロナワクチンの買占めのため低所得国でワクチン接種がすすまない現実、世界中で生じたCOVID-19に関するデマやフェイクニュースなどを見ると、WHO憲章の正鵠を射る簡潔な文章は21世紀のコロナ禍の現状を見透かしているようでした。

第二次世界大戦という戦争と感染症の脅威を体験した直後の世界において、すべての国々による国際協調と一般市民の健康に対する理解（いま風にいえば、ヘルスリテラシーということもできる）を切望していたことがよくわかります。COVID-19を経験することにより、WHO憲章が歴史的な価値だけではなく、極めて現代的な意義をもつことを改めて認識することができました。

WHO憲章の精神普及を目的とする社団法人日本WHO協会が京都市で設立したのが1966年でした。京都商工会議所で開催された最初のWHO講演会では、武見太郎氏（当時日本医師会会長）や平沢興氏（元京都大学総長）らが講師を務めました。それから、半世紀以上の年月が過ぎました。

公益社団法人日本WHO協会として、原点であるWHO憲章の精神を学び直すことにより、未来に向けた健康とウェルビーイングの座標軸を創造していきたいと思います。皆さま方からの忌憚ないご意見やご提案をお寄せいただけると幸いです。

2023年1月